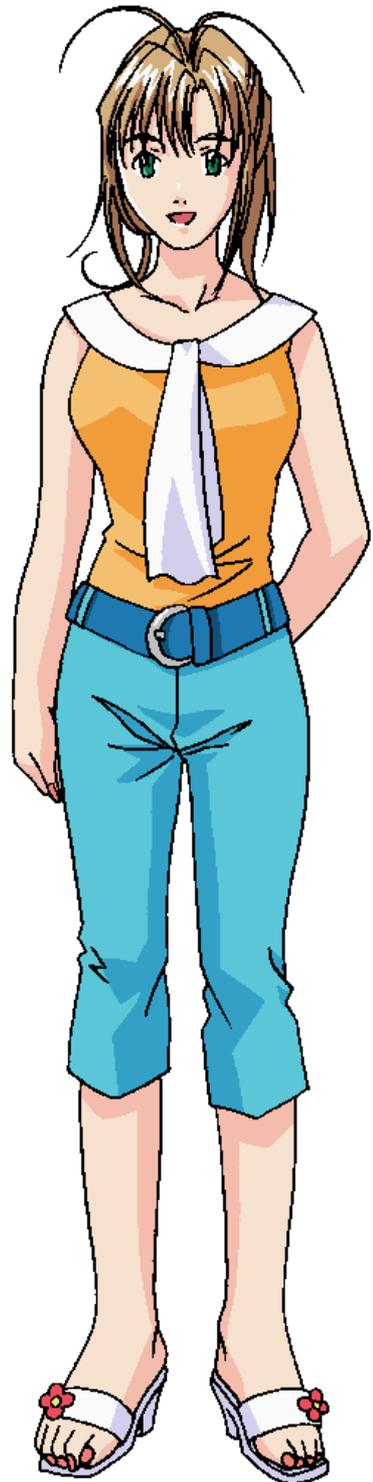


安心院保奈のプロフィール



名 前	安心院 保奈
ふりがな	あじむ やすな
誕生日	1985 年 2 月 12 日
星 座	みずがめ座
血液型	A 型
サイズ	T158, B84, W59, H85
趣 味	楽器(ウクレレ、ピアノ、フルート)、歌を歌うこと、音楽鑑賞、映画・ビデオ鑑賞、読書、手芸、お菓子作り
愛 称	あじむ、ホナ
好きな学科	音楽、国語、日本史
嫌いな学科	数学、理科(物理)
好きなもの	ソフトクリーム、レアチーズケーキ、ホットミルク、グラタン、パン屋さんの匂い、波の音
嫌いなもの	毛虫、不良、チカン、歩きながらタバコを吸う人
好きな色	白、水色、ピンク
好きな花	スイートピー
好きなスポーツ	バドミントン、輪になってするバレーボール
初 恋	?????(秘密)





保奈の家族構成・家庭環境

父・安心院章吾(44) 母・環(たまき/42)

父の職業は国際線パイロット。母は主婦の傍ら、薬師倉(やしくら)市久遠座(くおんざ)海岸通りにてオリジナル&輸入雑貨の店『KA MAKANI(ハワイ語で“風”の意)』を経営(不定休)。

父方の祖父母、安心院吉之助(75) 田鶴(71)は九州・大分県にて健在。母方の祖母・巴霞崎 薫(みかざき・かおる/69)は長男の家族と共に福島県在住。祖父・重行は既に他界。

現在、父の章吾は長期フライトのため3ヶ月くらい家に帰ってきていない。1年のうち2ヶ月程度しか自宅にいられない状態で、保奈は中学の頃からほとんど母と二人暮らしのような生活を送っている。

住所は、神奈川県薬師倉(やしくら)市小松崎2-4-15。“超”がつくほどではないが、一応、高級住宅街としてその名を知られた地域。

土地は120坪ほどあり、外観は洋風.....ギリシャの遺跡を思わせる白亜の建物。昨秋まで東京に住んでいたが、この家を中古物件として見つけた章吾の衝動買いで薬師倉へ引っ越し事となった。それに伴って保奈はそれまで通っていた学校の姉妹校である、『朱鷺羽(ときわ)女学院舞南(まいなみ)高等学校』へ編入した。

衝動買いで高級住宅街に家を持つ父を持つ保奈は、それなりのお嬢様.....ということになる。

保奈の生い立ち

1985年2月12日午前5時32分、都内の『岡崎産婦人科』にて、歌うような産声(医師談)をあげる。体重2700g、すこぶる元気な赤ん坊であった。

父の章吾が国内線のパイロットだった時期で、比較的プライベートな時間がとれていた事もあり、幼少時の保奈は両親の愛を惜しみなく注がれて育つ。当時、まだかなりの大きさと重さだったビデオカメラを担ぎ、章吾は愛娘を撮りまくった。

1985

翌年、1歳になった保奈が、デパートの屋上で章吾に舐めさせてもらっていたソフトクリームに顔を埋めて意識を失うという騒ぎが起こる。(何て食い意地の張った娘なんだ.....)と一瞬でも思ってしまったことを、章吾は今でも悔やんでいる。

保奈は“おたふくかぜ”に冒されていたのだった。

その後、保奈の“流行病にかかりやすい体質”は今でも変わっていないようである。

1986

2歳になり、ようやく“つかまり立ち”ができるようになる。

そして「まんま、ぶーぶ、ぱぱ、ママ」などの言葉も覚え両親を喜ばせるが、それ以上に二人が興味を持ったのは保奈の“はなうた”であった。

テレビの前で、レコードを聴く父のそばで、街をゆくベビーカーの中で、保奈は聞きようによっては“歌”ともとれる声をしばしば発した。母の環が、胎教に良いと言われ保奈がお腹にいる頃よくレコードを聴いた効果なのではないかと思われた。

父の章吾が面白がって、毎日のようにクラシックのLPレコードや流行歌の“ドーナツ盤”を買って来ては保奈に聴かせた。章吾自身も愛聴していたビー

1987

トルズやナット・キング・コール等のメロディアスなナンバー、そしてバッハやモーツァルトなどを聴く時、保奈はとくに心地好さそうにしていた。

初めて保奈が“歌詞”らしきものを伴って歌ったのは、ジョン・レノンの『イマジン』。

「いまじー……」の後は「おー、だーひいほー」という感じだったが、両親は痛く感動した。そしてお決まりの親バカ台詞を口にする。

「うちの子、神童かも……」

1988

3歳の頃、保奈は隣家に住む太田 寿成（おおた・かずなり）という一つ年上の男の子と仲良しだった。母親達の談笑を遠く近くに聞きながら、保奈は寿成と一緒に砂と戯れ、散歩の犬とじゃれ合い、滑り台で遊んだ。寿成は木登りが得意で、登れない保奈はいつも羨ましく見上げていた。

ある日、いつものように木の上にいる寿成が、保奈を呼んで何かを投げた。受け止めそこねた保奈の顔の上に、それは張り付いた。“毛虫”であった。ちくちくする。もぞもぞ動く。なんだかへんな臭いがする。一瞬にしてパニックに陥った保奈は、その得体の知れない物体を手でつぶしてしまった……。

保奈の顔は一週間ほどかぶれてしまい、ちょっと反省した寿成はお詫びのしるしに、大切にしていた、当時 公開され大人気だったアニメ映画に出てくる架空の動物のぬいぐるみをプレゼントしてくれた。保奈はこの事件がトラウマとなり、16才になった今でも“毛虫関係”を人一倍恐れている。

1989

4歳になった保奈を、両親は“お稽古ごと”に通わせるようになる。強制するつもりはなく、「何かの才能なり好きになれる事があるのなら、早めに気づく方がいい」「そういう物にもし出逢えたら、それだけが続ければいい」そのきっかけを作ってやろうという理由からであった。結局、「お習字」「ピアノ」「英会話」に本人が興味を持った様子だったので、しばらく続けさせてみた。やがて習字は、家で練習する保奈がしばしば墨汁を床にぶちまけてしまうため母親の頼みで、そして英会話は、クリスマス会でのプレゼント交換で『害虫の模型セット』が当たったショックから保奈が立ち直れなかったため・・・と、どちらもその本質とは関係ない理由で辞める事になる。だがピアノだけは、中学3年の受験シーズンまで続けた。

その年の春、保奈は家から徒歩約15分のところにある『世田丘幼稚園』に入園。初めての団体行動に戸惑い、朝泣きながら出かけていく事もあった保奈だったが、やがてすぐに“友達ができる”という楽しさに気付く。そして「朝どうナダメて幼稚園へ行かせようか」という事に腐心していた母親の環は今度、毎日保奈が泥だらけにして帰って来る園児服をどう洗濯するか、という問題に悩まされることになった。



保奈に毛虫を投げつけた太田寿成もこの幼稚園に通っていて、相変わらずくっついて遊んでいた保奈には一つ年上の友達がたくさんできていった。しかし、それが、保奈に初めての“別れの悲しみ”を味わわせることになる。

寿成や、一つ年上の仲良しの友達が皆、一年早く卒園してしまったのだ。卒園式の後の謝恩会で、寿成達が『オブラディ・オブラダ』を合唱した。遠くからそれを聴いていた保奈は、楽しく元気な歌を聴いているのに涙が止まらない事が不思議でならなかった。これが「別れ」なんだ.....締め付けられていた小さな心が、やがてどこかでそう悟った。

1990

6歳、小学校入学。

『世田丘第2小学校』1年2組、担任は後藤沙織という、若い女の先生だった。入学式当日、後藤先生は保奈の名字を「あんしんいん」と読んだ。間違っていると云おうとした保奈だったが、皆の前で言い出す勇気が出ない。その時、近くの席にいた宮坂小春という少女がもじもじしている保奈に声をかけてくれた。

「どうしたの？ おトイレ？」

「ちがうの.....あのね、あの」

ぼそぼそ言っている保奈の様子から察した小春は、保奈の名札を見て気づき、大声で先生に伝えてくれた。

保奈はその時初めて、自分の名字が珍しい物なのだとわかった。同時に、その日から「あじむ」は保奈の愛称になった。

1991

二年生になった頃には、すっかり学校にも慣れ、毎日が楽しくて仕方なかった。

得意科目は国語で、テストは常に90点以上。しかし算数がどうしても苦手で、居残りで計算の練習問題をやらされたりした。そんな保奈に、算数の得意な小春がいつも付き合ってくれた。

ある晩テレビで、「究極の選択！ “足し算のできない女”と“計算高い女”、あなたならどっちを選ぶ??」というのを観て、保奈は真剣に悩んだりもする(“計算高い”の意味はわからなかったが)。のちに九九の単元に入った時など、保奈は更なる地獄を見る事になるのだった.....。

1992

当時ピアノに熱中していた保奈は、特別に週三回の稽古を組んでもらっていた。そのため、放課後はなかなか友達と遊ぶことができず、本当に仲良しと言える友達はほんのわずかであった。一番の親友は、入学式の日親切にしてくれた宮坂小春。

あの出来事は鮮烈で、兄弟姉妹のない保奈はしっかり者の小春をお姉さんのように慕い頼りにしていた。小春の家は花屋を営んでいて、保奈が遊びに行くといつも店先から小春の部屋まで花の香りが漂っていた。

1993

保奈の8歳の誕生日に、小春の母親が花束をくれた。両手いっぱい真っ赤なスイートピー。この時の保奈の感動と喜びようは筆舌に尽くし難いもので、それを知った父の章吾が「保奈のブーケ・バージンを奪われた！！」と地団駄を踏んで悔しがった。父は一人娘がそれなりの年齢になった時、自分がその記念すべき大役を果たすつもりでいたらしかった。

「ばーじんをうばうってなに？」

と保奈に訊かれ、さっさと自室に閉じこもってしまった父を横目で睨みながら、環が優しく教えてくれた。

「初めての、素敵なこと」

花を飾った部屋はそれまでよりとても明るく、そして暖かく保奈には感じられ、心が安まる気がした。たまに学校で嫌な事があっても、それを見るだけで忘れられた。保奈は、枯れるとすぐに新しいスイートピーを環にねだるようになる。時々、章吾が保奈の部屋に飾られた赤いスイートピーを見ては、保奈が生まれる前に流行ったという歌を口ずさんでいた。今も保奈が好きな歌のひとつである。

小春の母がくれた初めてのスイートピーは、環に教えてもらいドライフラワーにして、今でも机の引出しの奥に大切にしまってある。

三年生になる時、初めてのクラス替えがあった。担任はベテランの田口末乃先生。自分で出した宿題を忘れてしまう事で人気の先生だった。残念な事に、大好きな宮坂小春とは別々のクラスになってしまった。寂しくて、三年生初日の夜は泣いてしまった保奈だったが、すぐに新しいクラスでも友達ができた。角井由香、徳安麻里、佐藤祐子の三人と、保奈は気が合ってよく遊んだ。だがクラスの違う小春とも変わらず仲良しだった。

一緒に街へと出かけては文房具店に入り、小物やシールを買ったりした。後に、可愛い文具やシールなどを集めて交換するのが学年の女子の間でブームになるのだが、その火付け役が何をかくそう保奈と小春であった。

買ってもらったはいいものの乗れずにいた自転車に乗れるようになったのが、この年の夏の始め。由香、麻里、祐子と夏休みにサイクリングに行く約束をしてしまい困っていた保奈に、小春がつきっきりでコーチしてくれたのだった。

1994

四年生になって、保奈は初めてピアノの発表会に参加する。初参加ながら、審査員特別賞を獲得。自分の奏でる音楽を人に聴いてもらう喜びを、保奈はこのとき初めて味わう。その年の秋頃から、保奈は音楽家の伝記を読み漁るようになり、難しい漢字もたくさん覚えた。初めて読んだ伝記は、モーツァルトのものだった。クラシック音楽をたくさん聴いたが、なぜか何を聴いても聴き憶えがある気がして、不思議だった。

モーツァルトとバッハが特にお気に入り、ピアノでも好んで弾いていた。



聴くたびになぜか特別な懐かしさを覚える『アヴェ・ヴェルム・コルプス』を弾いてみたくて、オルガンもちょっとやってみたりした。この曲は幼少時、章吾が特に繰り返し聴かせてくれていた曲であった事が、後でわかった。

当時、まだ家にピアノがなかったので、放課後音楽室にこもって日が暮れるまで小春と二人でピアノを弾いた。

当初あまりピアノには興味を示さなかった小春も、保奈に教えられるうちに楽しくなったようで、二人で簡単な“連弾”をやるまでに上達した。

ある日、時間の経つのを忘れた二人が夜まで音楽室にいてしまい、それまでは大目に見てくれていた田口先生から注意を受ける。その出来事をきっかけに、環が章吾に相談、ピアノ購入が決定。晴れて保奈は、自宅でピアノを弾ける環境を手に入れ、今まで以上に打ち込むようになる。

5年生で再びクラス替えがあり、そこで小春とまた同じクラスになった。ピアノの発表会で以前のような結果が出せなくなった保奈が落ち込んでいると、小春が唐突に、一緒にスポーツをやらないかと言ってきた。クラスの運動好きが集まって担任の片山津先生（背が高く優しい、男女両方に人気のスポーツマンだった）の許可を取り、放課後の校庭や体育館で様々な種目を楽しんでいるという。小春はそのリーダー的存在だった。

今までスポーツらしいスポーツをした事のなかった保奈は、ほとんどの種目で“みそっかす”寸前。だが『バドミントン』だけは、本格的な競技としてやる者がいなかった事もあって楽しむ事ができ、保奈は皆で汗を流す楽しさを知る。

そして、その効果は意外なところ.....ピアノにもあらわれた。

悶々と煮詰まりがちだったピアノからしばらく離れる事で、逆に自然体で鍵盤に向かえるようになったのだ。

「音楽ってさ、音を楽しむって書くでしょ.....何か最近のあじむ、私と毎日音楽室でピアノ弾いてた頃みたいに楽しそうじゃないって思ったの」

発表会で好成績を残した保奈に、クラスメイトと一緒に聴きに來てくれていた小春が言った。

「小春ちゃん、ありがとう.....」

5年生の終りに、保奈のクラスに転校生がやってくるという噂が流れた。だが、終業式の日を迎えても転校生は現れず、春休みに入り、いつしか保奈も皆も、そんなことは忘れてしまっていた。

その、6年生に上がる前の春休みに、保奈は人生最大の大けがをしてしまう。その日は、片山津先生といつもの仲間達と一緒に、丸一日公園のグラウンドを借りて遊ぶ事になっていたのだが、あいにく雨が降ってしまった。代わりに、

1995

1996

先生が学校の体育館を借りてくれたので、少しでも長くみんなと遊びたい保奈は早く学校に着きたくて、傘をさして自転車に乗った。

前方の横断歩道の信号が青色の点滅から赤に変わったが、車道の信号が青になるまでには渡りきれぬだろう、保奈はそう思ってペダルを漕ぐ足を緩めなかった。そこへ、歩行者用信号はもう赤だから誰も出てこないだろう、と思っている運転手が乗った10tトラックがスピードを緩めずに突っ込んで来た。

自分のすぐ横に大きな壁が迫っているような気がして振り向いた次の瞬間、保奈は空を飛んでいた。路面が滑り、止まりきれず保奈を避けたトラックの車体が、保奈の自転車の前輪を弾き飛ばしたのだった。

車道の真ん中に転がった保奈は、一度に身体のおちこちから質の違う疼痛を感じた。アスファルトと雨の匂い、そして「誰か救急車呼んでくれー！！」という若い男の声。遠のく意識の中で、保奈は何故か羞恥心に襲われた。どうしてだかわからないが、自我に目覚めかけていたその頃の保奈は、救急車に乗せられる事に抵抗を感じたのだった。

「大丈夫です……タクシーで」

よくわからない言葉を残し、保奈は意識を失った。

幸い、開いていた傘がクッションになって頭部への打撲がなく、生命に関わる怪我もなかった。とはいえ、鎖骨を複雑骨折してしまっていた為、入院は免れなかった。

保奈のいた大部屋にはお年寄りの入院患者が多く、皆可愛がってくれたが、やはり同じくらいの歳の子が恋しかった。

小春が毎日、友達を連れて、時には一人でお見舞いに来てくれるのが何より楽しみだったが、新学期が始まってからは放課後にならなければ誰も来てくれないので、寂しくなった。勿論ピアノを弾くことなどできない。母の環がそんな保奈に“フルート”を持ってきてくれた。小さい頃、環が教えようとしたが、保奈は持たせても振り回して遊ぶばかりだったのでやめていたのだった。

保奈は、こんな繊細に作られたものを振り回していたなんて……と反省しつつ環に基礎を教えてもらい、毎日屋上で少しずつ練習をした。なかなかうまく吹けなかったが、その柔らかな音色は保奈の心を癒した。

そんなある日、一日おきくらいに授業をしに来てくれていた片山津先生が、“手紙の束”をどっさり持ってきてくれた。クラスメイト全員からの、励ましの手紙だった。みんなが自発的に書いた、5年生の時と変わらぬメンバーでみんな保奈の帰りを待っている、と先生は言った。

その夜、保奈は消灯時間を過ぎても手紙を読み耽った。小春や、仲良しの友達からのものも勿論だが、普段あまり話さない級友からの手紙にも胸を打たれた。

(小森君って、こんな字を書くんだ……)

(杉本さんが、私の事そんなふうに思ってくれていたなんて……)



保奈はその日、生まれて初めての“徹夜”をした。真夜中に母に電話をかけ、こっそり便箋を持ってきてもらい、明け方までかかってクラスの皆に返事を書いたのだった。

骨のつながり具合を見るレントゲンの日がやってきた。順調に回復していれば、膨らみ始めた胸をガチガチに固めているギブスを外してもらう事ができる。だが、結果は残念な事に、入院の延長……しかも、やはり手術して金具を埋め込もう、という世にも恐ろしい治療方針の変更が宣告された。

病院の庭のベンチで、美しく咲く桜を悲しく見上げている保奈に、松葉杖をついた少年が声をかけてきた。

「おう、元気ないな」

保奈がテレビの中でしか聞いた事のない、“関西アクセント”だった。

「元気な入院患者なんて、いないと思います」

保奈は普通の精神状態でなかったためか、珍しく初対面の相手に憎まれ口をきいてしまった。

「あほ。外科病棟にゃ元気な患者がウヨウヨしとるわい。どいつもこいつも健康そのもの、汗くそうてしゃーないわ」

端正なルックスとコテコテの関西弁のアンマッチが妙に印象的な、長身で浅黒い肌の少年。

「ま、一番元気なのは、このオレやけどな。あーっはっはっは！」

親指で自分を指し、少年は大声で笑った。保奈はその厚かましい態度に嫌悪感を覚え、ベンチを立った。だが、あんなに気持ちよく笑う人間を初めて見た気がして、同時に新鮮な感動に似たものも覚えていた。

その日の午後、病室でぼんやりしている保奈の所へ、先ほどの松葉杖の少年が現れた。

「おっ、いたいた」

ベッドのプレートを見て、言う。

「あんしんいんほな？何やけったいな名前やなあ」

「ちっ……違います。私の名前は……」

「まあええわ。オレは音峰結真。よろしゅうな」

不意に、しかし自然に差し出された手を、保奈は握り返そうとして引っ込めた。

「あ、あの……私の名前は……」

「看護婦さんに聞いたで。ホナお前、手術と入院延長が決まったんやてな」

「……………」

(口は悪いけど、この人まさか私を励ましに来てくれたのかしら……)

一瞬でもそう思った事を、保奈は後悔する事になる。

「ごっつう痛いらしいでエ、手術」

音峰結真と名乗った少年は、どこの誰に聞いた話なのか、手術の苦痛と恐怖をそれはオーバーに、脚色に脚色を加え保奈に語って聞かせた。

「やめてーっ！」

恐怖の限界を超えた保奈が遂に叫んだ。

「もうっっ！信じられない！どうしてそんな話するの！あなたって最低！いじわる！！」

すると音峰結真はまた、大きな声で笑った。

(ううっ……完全にバカにされているんだわ)

そう思い込み落ち込む保奈に、結真は言った。

「その元気があれば、大丈夫や。頑張り」

地獄を覚悟して臨んだ手術は、呆気なく終わった。

その傷もやがて癒え、退院を間近に控えた日、音峰結真は保奈の名前を「ホナ」だと勘違いしたまま、一足先に退院していった。

「ホナ、さいなら。あーっはっはっは！さぶーっっ！！」

これが結真の最後のセリフであった。

学校に復帰した保奈は、迎えてくれた6年2組のクラスメイトの中に意外な人物の顔を見つけ、驚く。

「ホナやんけ！」

5年の終りに来るはずだった転校生とは、音峰結真の事だったのだ。

結真はまるで、ずっと前からこの学校にいたかのように皆に溶け込んでいた。

自分がないものを持った結真の一挙手一踏足は、それまで小春に感じていたある種の憧憬とはまた違った、幾多の小さな“衝撃”を保奈に与え続けた。

いつしか、気が付くと一緒にいる保奈と小春、結真の三人は周囲から“トリオ”視されるようになる。特に、威勢のいい結真と内気でおとなしいイメージの強かった保奈の組み合わせは、皆を驚かせた。結真は保奈の本当の名前が「ヤスナ」だと知ってからも、保奈を「ホナ」と呼びつづけた。

そして翌年の春、3人はほとんどの者が行く地元の公立中学へと進学。クラスは、小春と結真が一緒。保奈だけ別になった。

中学1年の夏休み、父・章吾が国際線のパイロットになった記念旅行として、保奈は初めての海外旅行を経験。母の環と二人、父の操縦するジャンボ機でハワイへ。章吾は現地での休暇を取得していた。

この旅で、母の環はカパウという街にある雑貨屋の主人と意気投合し、その協力と章吾の援助を得て、数年後自らも薬師倉市久遠座(くおんざ)に雑貨店を開くに至る。



ハワイ滞在数日目、コナ・ビレッジ・リゾートの浜辺で、保奈はある楽器と衝撃的な出逢いをする

それは、夕暮れ時だった。

三日くらいで泳ぐ事にも飽きてしまい、その日は初挑戦のテニスに汗を流した保奈が海を眺めていると、どこからかコロコロと哀調を帯びた弦楽器の音が聞こえてきた。やしの木の下で、波音を聴きながら、一人の初老の男がギターを小さくしたようなそれを奏でている。とても一本の楽器から発せられているとは思えないその音色を、保奈は眼を閉じて聴き入った。やがて男は弾き終わると、その楽器を紫色に染まる海に向けてかざし片目をつぶり睨んだりしている。

保奈にしては珍しいことだが.....おそらくは小春や結真と付き合うことによっていつしか得た勇気で、保奈はその奏者に近づき、思い切って声をかけた。男は、人なつっこい笑顔を保奈に向けてくれた。日に焼けた顔に白い歯が眩しい。

幼少時に塾はすぐ辞めたが、父親に英会話を習っていたので、保奈はカタコトながらも今自分が与えてもらった感動について懸命に伝えようと試みる。海からの微風に豊かなグレーの髪を揺らしながら、何と男は流暢な日本語で保奈に応えてくれた。

その楽器は“ウクレレ”というらしい。

今奏でていたのは、『Where Is My Love Tonight』という曲だと言う。男は再び“ウクレレ”を弾き始める。蜘蛛の脚のように動く男の指にただただ驚く保奈だったが、やがて目を伏せ、時の経つのを忘れ、その音色と旋律に身も心も委ねていった。いつしか空には星が輝いていた。

「歌は好きですか？」

そう尋ね、保奈の答えを待たずに男は『When you wish upon a star (星に願いを)』をゆったりと爪弾き始める。またたく星、頬をなでる潮風、そして波の音に包まれて、保奈は歌った。ずっとこうして歌っていたい・・・そんな恍惚感の中、保奈はたくさんの流れ星を見たような気がした。

終わるのを惜しむようにゆっくり、そしてそっと最後の和音が奏でられる。保奈が、見知らぬ楽器を魔法のように鳴らす出逢ったばかりの紳士と、こみ上げてくるような微笑みを交わした時、背後からたくさんの拍手が聞こえた。音を聴きつけてやってきた他のリゾート客が、二人の“セッション”に惜しみない賛辞を贈ってくれていた。

「お嬢さん、この楽器に興味を持ったのならプレゼントします」

「え?!」

「私の息子のために作ってもらったもので、試奏していたのですが、仕上がりは完璧です」

「あ、でも……あの」

「素敵な歌をありがとう」

去って行こうとする男に人々が駆け寄り、握手やサインを求めたりしている。

(きっと有名なプロ奏者なんだ……)

保奈は鮮烈な余韻の中でぼーとしながら、男の背中を見送った。

男が何と呼ばれていたのか、聞いた気がしたが憶えていない。確か似たような名前の家が近所にもあったような気がする……

コテージでは、波音と愛娘の歌声を遠くに聴きながらワイングラスを傾けていた章吾と環が、新婚気分で楽しく食事をしていた。

「ギリシャはいいよ、環……いつかパルテノン神殿みたいな家に住みたいね」

帰国した保奈は、早速教則本を買い、ウクレレの練習を始めた。

やればやるほど、あのウクレレ奏者の表現力の豊かさと類まれな才能、そして身に付けた技術の高さを思い知らされる。コナの浜辺ではすべてがあんなに豊かに感じられたのに、実際に今自分の抱いているウクレレの音域、音量の何と乏しいことか。だが、保奈は、この小さな楽器に無限の何かが宿っている気がしてならなかった。

ピアノのレッスンも、いつしかウクレレのために通うというスタンスになった。何か……おそらくは至極シンプルなもの「何か」がわかるまで、音楽の基礎を徹底的に自分にたたき込んでおこうと思う保奈だった。

1998

2年に進級して、今度は保奈と音峰結真が同じクラスになった。

だが小春を含めた三人の付き合いは小学生時代のノリのまま変わらず、楽しかった。初夏のある日、小春から相談を持ちかけられるまでは……

「私、音峰結真の事好っきゃねん」

小春は唐突に、冗談めかして言ったが、目が全然笑っていなかった。保奈は目を丸くして驚いた。結真をそんな意識で見た事がなかったし、三人はいつまで経っても“仲良し三人組”のままだとばかり思っていた。

小春によると、結真はああ見えてなかなか神経が細かく、優しい奴なのだという。絵を描いたりする一面もあるらしい。それは保奈も知っていた。

小学生時代、彼は写生大会の風景画で表彰されたりしている。

「あじむ、小学校の時あいつが入院した理由、知ってる？」

「交通事故だって聞いたけど……」

「それはそうなんだけど……赤信号に気づかず横断歩道を渡ろうとしたお婆さんを庇ったんだって」

「……」

「本人は言わないけど……見た人がいたの。そういう奴なのよね」

普段は結真と男同士みたいな口をきいているくせに、小春はいざ告白となると尻込みしてしまうらしい。保奈は小学校1年からの大親友である小春のた



めに、協力することを約束する。

だが.....保奈が小春からの手紙を渡そうとすると、結真は拒んだ。そして彼ら
しからぬ曖昧な態度でそそくさと逃げて行く。

訳がわからず、そのままを小春に報告すると、小春は突然怒り出した。

「あじむ.....あんた、嫌な女だね」

「こ、小春ちゃん.....?」

保奈はショックだった。小春の言葉の意味がわからなかった。

その年の夏休みは、小学校以来、初めて小春と一度も遊ばない夏休みになっ
た。8月に入った頃、小春から「ごめん、音峰の事はもういいから.....」とだけ
電話があったが、保奈は何と言ってよいのかわからなかった。結真にも、結局
連絡しそびれた。結真の方から何度か電話があったが、結局環に頼んで居留守
を使ってしまった。

あんなに仲良しだった二人と、自然に付き合えなくなってしまった寂しさに、
保奈の胸は締め付けられた。

一番楽しい夏休みになる筈だったのに.....

悲しい気持やもどかしい気分を紛らわすために、保奈はピアノのレッスンとウ
クレレの練習に没頭した。

二学期になり、小春が、「夏休み中に音峰に告白して、フラれちゃった」と打
ち明けて来た。いつもの笑顔だったが、「あいつ、きっと.....」と言ったきり口
ごもってしまい、話はそれきりになった。その後、何となく気まずさを感じ、
小春とは以前のように一緒にいることがなくなっていった。

結真はこれまでと変わらず保奈に接したが、小春の事を思い、保奈はつい彼に
対して距離をとってしまうのだった。

皮肉にも、今までのように接する事ができなくなって初めて、保奈は自分の気
持ちに気づいた。自分も、音峰結真に惹かれていたのだ。多分、いやきっと、
手術に怯えている所を励ましてもらったあの時から.....

秋の文化祭の実行委員を決めるホームルームで、保奈がクラスの代表に選ばれ
た。迷惑にも、推挙してくれたのは、音峰結真。

「お前しかおらへんやんか、ンなマメな仕事やれんの」

睨みをきかせても全然怖くない保奈に、結真が言った。そして、実行委員など
という大役を任せられプレッシャーの保奈に、更に大変な役目が回ってくる。

今年是有志団体の数が足りず、体育館での余興の時間が大幅に余ってしまうの
で、実行委員の中からクジ引きで数名、余興の出演者を選出するというのだ。

保奈は、自分から申し出てあみだくじを作った。くじを作った本人が当たるという事はあまりないだろうと思ったのだ。だが、それは何の根拠もない思い込みだったと言うことに、保奈は数分後に気づく事になる。

文化祭のステージで、大勢の生徒の前で一体何をやればいいのか。

部屋のスイートピーを眺めていると、気まづくなった小春との事まで不意に思い出され、果てしないため息が溢れた。

そうだ。

ウクレレはどうか.....

いや、でも..... “ ハワイのおじさま ” の見事な演奏を目の当たりにしているだけに、人前で自分の

稚拙な演奏を披露する気になどなれない。やっぱり、ピアノを弾かせてもらおうかな。そんな事を考えながらも何となくウクレレの教則本を捲るうち、保奈は練習曲の中に『星に願いを』を見つけてハッとする。

そうだ.....

歌.....

あのハワイ紳士のウクレレにのせて歌を歌った時、今まで味わった事のないような幸福を感じた。無心に歌った、あの夜.....拍手も賛辞も賞状も期待せず、ただウクレレの音色に寄り添って歌った、あの浜辺。心の底から楽しかった。髪の手先から爪先まで、その心地好さがしみわたっていた。

そうだ、ウクレレで歌を歌おう.....あの人と同じように弾く必要はないんだ.....自分らしくやってみよう。

二週間後の文化祭のステージで、保奈は三曲ほどウクレレ弾き語りを披露した。当初は一曲の予定だったのだが、客席から意外なほどのリアクションがあり、ステージを下りられなくなってしまったのである。父がよく口ずさんでいた『赤いスイートピー』、保奈自身お気に入りのヒット曲『長い間』、そして最後にまだ練習中だったカーペンターズの『デスペラード』を歌った。

大半の聴衆がウクレレというものに馴染みがなかった事、その見慣れない楽器を爪弾きながら美しい歌声を披露したのが普段あまり目立たない二年生の女子だった事.....話題性は十分だった。

文化祭が終わると、想像もしなかった事態が起きる。その歌声に魅入られた男子生徒達から、次々と告白を受けるようになったのだ。一人や二人ならまだしも、数日のうちに上級生から下級生まで、優にひとクラス分の男子生徒からの





ラブレターが保奈の靴箱に詰め込まれた。

こんなに手紙をもらったのは、小学校の時の入院以来である。そんな“現象”にただ驚くばかりで、そのどれにも返事などできるわけもない保奈。そうこうしているうち、今度は逆に保奈に関する悪いウワサが飛び交い始めた。女子達の嫉妬、ねたみ、返事をもらえない男子達の逆恨み……社会の縮図か世の常か、保奈に対する負の感情が漂い、渦巻き始めた。

しかし、最悪の状況に至るのを未然に防いでくれた者がいた。音峰結真である。そのやり方は、はなはだ非効率的で、カッコ悪かった。そこら中で生徒を捕まえては、

「2年3組の安心院保奈、オレと付き合ってるねん」

「あいつ、オレの彼女やねん」

そして最後に語調をちょっと変えて

「アイツは歌歌ただけや。あんまりいじめんといてえな」。

上級生などにはぶん殴られたりもしたようだが、それなりに男気の入った人物として知られていた結真の言うことなので、これは効果があった。

「どうして私が音峰くんの彼女なの?！」

とんでもない所からそんな噂を耳にした、何も知らない保奈が放課後の教室で結真に詰め寄った。

「責任とっただけや」

「え?」

「そもそも、お前を文化祭の実行委員に推薦したのオレやさかいな」

「どういう事?」

「……………そんなに嫌か」

「え?」

「オレの彼女や、思われんの」

「だ……だって……嘘じゃない。小春ちゃんが聞いたら……」

「細かい事心配すな。もうお別れや」

「え……お別れ……って?」

「オヤジがまた転勤しよんねん……『栄転』言うらしいけどな」

「……………」

「神戸から東京、今度はロンドンやて」

「ろ、ロンドン……?!」

「今度こそホンマのホナ、サイナラや。はっはっは!!」

そして去り際、結真は言った。

「おいホナ……小春と仲良くせえよ。お前ら親友なんやろ」

「……………」

「オレ、好きや」

「……………!」

「……………お前の歌」

保奈はしばらくして、結真が学校中に嘘をついて回った理由に気が付いた。庇ってくれたのだ……どうしてすぐに気づかなかったんだろう……ロンドンに行ってしまう前に、音峰君にちゃんと謝らなくちゃ……それに……………

だが結真は、当初保奈に告げていたよりも数日早く、突然いなくなった。

「あじむ、あんた……行かなかったの??」

その朝、顔色を変えた小春に言われ、保奈は目を瞬いた。

「オレの気持はホナに伝えたわ。オレの事好きやったら成田まで見送りに来てくれ言うといた」

結真は昨日、電話で小春にそう言ったという。

「そんな……私、何も聞いてないよ」

「あのバカ……」

「小春ちゃん……」

「あじむ、行こう」

二人は予鈴前の学校を抜け出し、バス停へと走った。保奈がお金を持っていない事に気づいた時、既に小春が行きつけのパン屋に駆け込み主人を押し倒してくれていた。

保奈が成田空港に着くよりも早く、結真を乗せた飛行機は滑走路を蹴っていた。機影を見送りながら、保奈の胸には今ごろになって、結真に向かって言えなかったいくつかの言葉がこみ上げてきた。フラッシュバックとともに……………

「こちらこそ、よろしく」

「あじむやすなって読むんです」

「励ましてくれて、ありがとう」

「庇ってくれたのに、ごめんなさい」

「私も、あなたの事が、好きでした……」

1999

中学3年の一年間、保奈は不思議と穏やかな気持で受験勉強に打ち込むことが出来た。小春と、中学生になって初めて同じクラスになった。時々二人の会話の中で音峰結真の名前が出たが、いつしか自然に、お互いその名前を口にする事はなくなっていった。

二人にとって、きっとそれは大切な初めての恋であり、それぞれの胸に、それぞれの音峰結真がいる。そんな思いが、二人にそうさせた。ただ時々、何かの拍子にお互い関西弁で話し笑い合う事があって、その時は胸の奥がキュンとなった。





2000

.....
翌春、保奈は第一志望校『朱鷺羽(ときわ)女学院』に合格。比較的自由な校風の私立校である。小春も、第一志望の公立商業高校に合格した。遂に、親友の宮坂小春ともお別れである。

二人は春休みにお互いの家に一泊ずつして、いろいろな話をした。

再会を約束した別れ際に、小春が結真の事を口にした。

「元気だといいいね.....あの関西人」

「うん.....きっと元気だよ」

ピアノ教室も辞める事になった。

「もう教える事はありません」

幼い頃から保奈を指導してくれた岩瀬先生はそう言ってくれた。

保奈は作曲をするようになった。自分の想いや感情、時々ある閃き、不意におりてくる何か.....そういったものを閉じ込めておかず、何らかの手段で表現したい衝動に駆られ始めていた。

ウクレレはなかなか上達しないが、湧き上がってきた旋律を紡ぎ合わせ、初めて自分でも気に入る曲ができた時、そしてそれを奏で歌ってみた時、ソウルだけは“ハワイのおじさま”にちょっとだけ近づけたような気がした。

その年の秋、父・章吾の“新居衝動買い”により、安心院家は神奈川県薬師倉(やしくら)市へ引っ越すことになる。学校に関して迷った保奈だが、幸い隣接する普慈浜(ふじはま)市との市境付近に通う高校の姉妹校があり、そちらへ移籍したい旨を学校へ申し入れたところ、受理された。

新しい住まいは海のそば、建物は白亜の洋館である。“パルテノン神殿”とまではいかないが、父・章吾はご満悦の様子だった。そして章吾は、引っ越しのついで(?)にパソコンを購入。たまに帰ってくると、何やら楽しそうに遊んでいる。自分を映画の主人公のように扱った特大のポスターを作ってみたり、昔どっさり録画した映像を編集して、保奈の結婚披露宴用『生い立ちビデオ』を仕込んだりしている。もし本当にそれを上映する日が来たらとか、その日にそんなものを観たら自分がどんな状態になるかとか、そういう事までは考えていないようである。

引っ越し当日、部屋の整理もそこそこに、保奈はウクレレ片手に近くの浜を訪れてみた。流木に腰掛け、爪弾いてみる。ハワイ以来の、波音と溶け合うウクレレの音色.....やはり格別だった。

通学には『薬師倉電鉄』を利用する。通称・薬師電(やしでん)、創業は明治時代だという。薬師倉の町中を民家すれすれに走っているかと思うと、突然海岸沿いの国道脇に出て、窓外に見事な景観が広がる。

初登校の日は、学校に行くのがもったいないほどの秋晴れだった。『観音寺』駅を過ぎて、不意に視界が海で一杯になった時、そして有名な観光スポットで

.....

もある『日向島(ひなしま)』を初めて見た時、保奈は思わず感嘆の声をあげてしまった。

(音峰君や小春ちゃんにも、見せてあげたいな.....)

『御座ガ浜』と『明神ヶ浦』の間、薬師電の線路と並走する国道の向こうに見える小さな砂浜が気に入った保奈は、時々学校帰りに途中下車してそこを訪れ、ウクレレを弾いて歌うようになる。

ある日、散歩の途中と思しき初老の紳士が保奈に声をかけてきた。

「お嬢さん、うちで歌ってみませんか.....？」

御座ガ浜のライブバー『J. O. D.』のステージで、保奈は週二回、歌うことになる。マスターは寡黙でダンディだが、時々唐突に寒い洒落を口にする人だった。店の名前は、古いブルースのナンバーから頂いているらしい。

ピアノの発表会や文化祭の余興とはまったく違った空気。見知らぬ人達ばかりの前で、まがりなりにもお金をもらって歌を歌うということは、保奈に想像以上のプレッシャーを感じさせた。うっかり客の嗜好に合わない歌をやったりしたら、聴いてもらえないのではないか。だがそんな緊張感がいい作用をして、保奈の歌をより研ぎ澄まされたものにした。どうしてもステージに立つのが怖い時には、音峰結真の言葉を思い出す。

「オレ、好きや.....お前の歌」

そして、ウクレレをくれたハワイの紳士の言葉を思い出す。

「素敵な歌をありがとう」

どんなリクエストにも応えられるよう、保奈は様々なジャンルの音楽を聴き、ウクレレと自分の声に合ったアレンジを施した。寝る間を惜しんでそんな作業を続けるうち、いつしか作曲をするにあたっての表現方法の引き出しが驚くほど増えている事に気づく。そうするとますます面白くなっていく.....

しばらくして、マスターが保奈にミニアンプやピックアップ、シールド、マイク等を一式プレゼントしてくれた。元来おとなしいタイプの保奈が人前で歌う姿にまだ少し「かたさ」を感じていたマスターは、海岸を訪れている人たち相手に演奏してみることを勧める。ライブバーのステージとはまた違う勇気が要ったが、海辺を散策する人々は気持ちが和んでいるのか、思ったより多くの人々が快く耳を傾けてくれた。保奈の歌声は、いつしか本人も気づかぬほどのびやかさを増していった。

月に一回、薬師倉から二駅の距離にある“小波が浜”で行われる保奈のミニライブには、今では数人の常連客がいる。海岸ライブの効果もあって、保奈の出演日に保奈の歌を聴くため『J. O. D.』に足を運んでくれるお客さんも現れ始めた。保奈は、以前にも増して歌うことが楽しくて仕方なくなっていた。

好きな歌を歌うことができる、それを聴いてくれる人がいる.....歌うたびに、

そのことへの感謝の気持ちと歓びで胸がいっぱいになるのだった。演奏曲



も今や、オリジナルが中心である。

新居の保奈の部屋には、結真と小春と三人で写ったスナップが飾られていた。これまでの保奈にとって、一番大切な季節。時々、部屋にスイートピーを飾る。保奈の今までの大切な思い出を、全部知っている花。音峰結真は、今頃どうしているだろう。

(会いたいな.....)

せめて手紙を書きたいと思っても、音沙汰がなくて住所がわからない。保奈はそれでも、時々結真宛てに手紙を書いた。薬師電の窓から見えた風景、学校での出来事、今日の夕空の色。そんな他愛もないことばかりだったが、したためる事が楽しかった。

(きっといつか、また逢えるよね.....)

そんなある日

東京の宮坂小春から、一通の手紙が届いた。懐かしさに胸を躍らせながら開いた文面には、にわかには信じられない、衝撃の事実が綴られていた。保奈はその手紙のショックから一週間ほど寝込んでしまい、今も胸を傷めたまま日々を過ごしている。その顔に微笑こそ戻ったが、日常の中、ふとした事で涙がこぼれてしまう。

悲しい出来事を、その事実を保奈が本当に受け容れるには、時間が.....そして“新たな出会い”が必要なのかも知れない。

翌年。春が過ぎ、高二の夏がやって来た。保奈は、半年ほど前から朝の薬師倉駅で自分を熱く見つめている少年がいることに、気づいていない。

彼の名は、仲井戸尋祐。どうも、保奈にひと目惚れしたらしい。音峰結真と違って、女の子に気安く声をかけたりできるタイプではないようだ。混雑した電車の中に保奈と一緒に押し込むとかして、距離を縮めてやらないと何もできない男の子かも知れない。だけどそういう奴に限って、そんな状況になった途端キスを迫ったり・・・するわけないか??

果たして安心院保奈に、新しいドラマは訪れるのか.....

皆さまどうか、見守ってあげてくださいね.....

メモ*****

音峰 結真

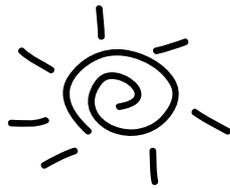
保奈が東京にいた頃のクラスメイト。

歯に衣きせぬ関西人で押しが強いが、毒舌の奥に時折優しさが覗く。

父の職業はシステムエンジニア。母は専業主婦。第一人、妹一人。

現在は英国ロンドン、コベントガーデンに在住。

2001



あじむ製作委員会